

江別市民音楽振興会創立10周年記念

うた・ガラ・コンサート

オペラ作曲家による歌曲とヴェルディの世界



倉岡 陽都美



岡崎 正治

マスカーニ「アヴェ・マリア」

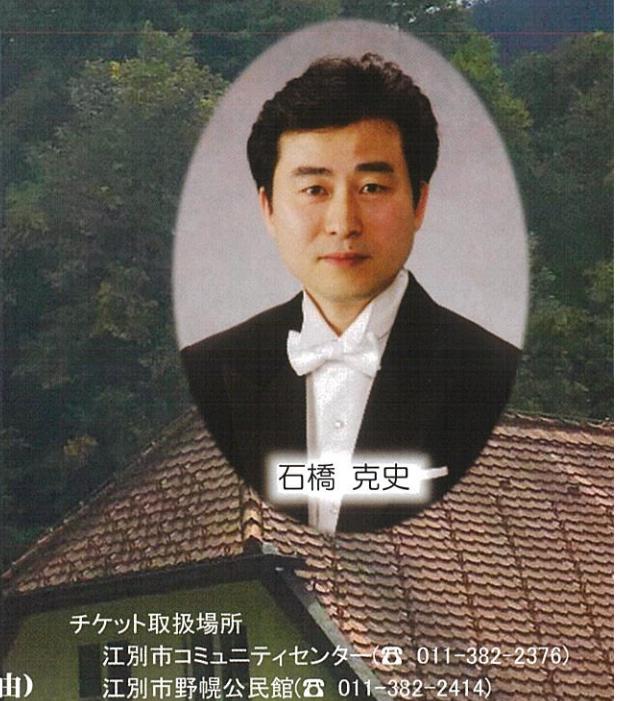
トゥーランドットより「お聞きください王子様」

アルルの女より「フェデリコの嘆き」

リゴレットより三重唱「ジョバンナ?…後悔しています」 ほか



岡元 敦司



石橋 克史

令和6年3月31日(日)

開場 13:30 開演 14:00

会場 えぼあホール

江別市大麻中町26-7
☎ (011) 387-3120
※JR 大麻駅から徒歩 3 分

前売 1,000円
当日 1,300円(全席自由)
※小中学生は入場無料。
※未就学児の入場はご遠慮ください。

チケット取扱場所
江別市コミュニティセンター(☎ 011-382-2376)
江別市野幌公民館(☎ 011-382-2414)
えぼあホール(☎ 011-387-3120)
江別市民会館(☎ 011-383-6446)

主催：江別市民音楽振興会（事務局 ☎ 090-6267-2727）

共催：株式会社江別振興公社（江別市公民館等指定管理者）

後援：江別市

倉岡 陽都美 KURAOKA HITOMI (ソプラノ)

昭和音楽大学卒業後、ロータリー財団国際親善奨学生としてイタリアへ渡る。バルマ王立歌劇場デビュー。ヴェルディ音楽祭、トスカニーニ・フィルハーモニー管弦楽団共演。「椿姫」「トスカ」「蝶々夫人」を演じる。

札幌コンサートホールKitara主催公演にて札幌交響楽団と共に、教文オペラ「ノンノ」タイトルロール出演。札幌文化芸術劇場hitaru主催公演「フィガロの結婚」に伯爵夫人役で出演。北の聲アート賞奨励賞、第31回道銀芸術文化奨励賞受賞。札幌大谷大学非常勤講師。藤原歌劇団正団員

岡崎 正治 OKAZAKI MASAJI (テノール)

イタリアオペラを中心に主役を演じる、北海道を代表するテノール歌手。「ラ・ボエーム」のルドルフオ、「リゴレット」のマントヴァ、「トゥーランドット」のカラフ、「カルメン」のホセ、他多数のオペラに出演。2019年3月の北海道二期会オペラ「椿姫」のアルフレード役、2021年2月公演のhitaru劇場オペラ「蝶々夫人」のピンカートン役において、紙面にて絶賛される。1995年新人音楽会札幌市民大賞、音楽家協議会特別賞、平成13年度（第11回）道銀芸術文化奨励賞受賞。現在、北海道二期会会員、札幌大谷大学声楽科非常勤講師、オペラファクトリー北海道副代表、Sound Creation Team MS_Z 取締役、映像と音楽の芸術集団ピッコロパルコ座長。

岡元 敦司 OKAMOTO ATSUSHI (バリトン)

国立音楽大学首席卒業、東京芸術大学大学院修士課程修了。ウィーン国立音楽大学マスタークラスを声楽最高位にてディプロマ取得。ボローニャ国立音楽院ではニコレッタ・コンティ氏にスコアリーディングを師事しディプロマを取得。皇居内桃華堂御前演奏会に招かれる。「フィガロの結婚」「リゴレット」「椿姫」他多数のオペラに出演。L'OPERA誌に“輝きのある高貴な声”と評される。自身のソロアルバムで矢田部賞、NTTドコモ賞。F・アルバナーゼ国際声楽コンクール他で多数受賞。北海道二期会会員、北翔大学教育文化学部教育学科音楽コース専任講師、北海道教育大学芸術スポーツ文化学科、札幌大谷大学音楽学科、各非常勤講師、ミトプロムジカ主宰。

石橋 克史 ISHIBASHI KATSUMI (ピアノ)

1989年愛知県立芸術大学卒業。1991年国際芸術連盟主催「新人推薦コンサート」出演、奨励賞受賞。同年渡独。1995年ドイツ・デトモルト音楽大学を最優秀にて卒業。この間、ドイツのハンブルク他5都市で演奏。1996年の帰国後はソロ、室内楽、歌曲伴奏などの活動を行っている。1997年~2001年及び2004年~2008年、2011年、2013年、2015年の13回にわたり、ソロリサイタルを開催。1999年のリサイタルでは札幌市民芸術祭奨励賞受賞。これまでにピアノを沼田元一、植田克己、笠間春子、田辺縁、クラウス・シルデ、エドゥムンド・ラスフェーラス、室内楽をエルケ・キルヒャー、歌曲伴奏をクリストフ・ウェーバーの各氏に師事。現在、札幌大谷大学、藤女子大学、札幌大谷高校非常勤講師。札幌音楽家協議会、ハイメス、モーツアルトアーベント各会員。

＊＊＊ 今回の演奏曲が歌われるオペラの概要 ＊＊＊

トロヴァトーレ（吟遊詩人）

15世紀、スペインのある地方に、幼い二人の男の子を持つ領主がいた。ある日、その子らに近づくジプシー女が捉えられ、呪いをかけた疑いで火あぶりの刑に処される。その夜、下の子が行方知れずになり、処刑の跡に幼児の白骨があった。それはジプシー女の娘アズチーナの仕業であった（しかし、混乱のあまり、火に投げ入れたのはアズチーナ自身の子であった）。成人した今、兄はルーナ伯爵として父の跡を継ぎ領地を治め、弟はアズチーナの子として育てられ吟遊詩人・騎士となっている。伯爵は女官レオノーラの美しさに惹かれている。一方レオノーラは、時々窓辺で歌う吟遊詩人マンリーコ（実は伯爵の弟）に心を惹かれている。しかし結局、レオノーラをめぐる争いから決闘となり、マンリーコは逃れ、レオノーラは尼になるべく修道院に入る。のちにマンリーコとレオノーラは結ばれるが、再びマンリーコは伯爵に捉えられる。レオノーラは伯爵に、我が身と引き換えにマンリーコの命乞いをするが聞き入れられず、マンリーコは火刑に処される。そしてアズチーナが「母よ、ついに復讐は成功した！」と叫び、幕は下りる。

レオノーラ(ソプラノ)、マンリーコ(テノール)、伯爵(バリトン)の三重唱

～「静かな夜だ！彼女は眠りに浸っているはずだ」

レオノーラ(ソプラノ)と伯爵(バリトン)の二重唱～「聞いているな？夜が明けたなら」

ドン・カルロ

“ヴェリズモ”と言われる、実話を基にした作品。16世紀のことで、スペインの王子であるドン・カルロはフランス王の娘エリザベッタに想いを寄せている。しかし、あろうことか政略結婚のため、エリザベッタは父の妃となってしまう。悲嘆にくれるドン・カルロのもとへ友人口ドリーゴが訪れ、当時圧政を受けていたフランドルの民を救いに行け、と励ます。その準備を進めながらもエリザベッタへの想いは断ち切りがたく、手助けに訪れたエリザベッタを思わず抱擁してしまう。しかしエリザベッタに「父を殺して母と結婚するのか？」と問われ、悲痛な叫びと共に立ち去る。エリザベッタをめぐる愛憎や政治上の対立から、すべては不幸な結果に向かう。為す術をなくし、呆然とただすむドン・カルロは、先祖の靈に導かれて修道院の奥へと消え去り、幕となる。

ドン・カルロ(テノール)、口ドリーゴ(バリトン)の二重唱～「彼だ！あれは、王子様だ！」

リゴレット

好色なマントヴァ公爵に仕え、悪行の手助けをする道化師のリゴレット。リゴレットには最愛の娘ジルダがあり、毎週、教会に通う清純な女性に育っていた。そしてついに、学生を装った公爵の目に留まり、魔手が伸びる。リゴレットは殺し屋を雇い、公爵を亡き者にせんと企てる。しかし、このことを知ったジルダは公爵の身代わりとなり、命を落とす。

ジルダ(ソプラノ)とマントヴァ公爵(テノール)の二重唱～「ジョバンナ？…後悔しています」